



内外のニュース

'98施設園芸技術展について

田 中 晶 子*

98年施設園芸技術展が4月21日(火)から24日(金)の4日間にわたり、幕張メッセにて開催された。隔年開催のこのイベントは、園芸産業の資材、設備、栽培装置から分析機器までを一堂に会する日本最大の展示会であり、今年8回目を迎える。出展参加社も225社460コマと前回の219社452コマを越え、過去最高の展示数を記録し、参加者も約40,000人と盛況であった。景気回復の見通しが依然として不透明な昨今、各社とも様々な創意・工夫が込められた展示内容であった。また、見学者側も優れた技術やアイデアを求めて、真剣に将来性のあるものを見極めようとしていた。

養液栽培研究会も例年通りの1ブースで出展をし、入会や継続の手続き、ハイドロボニックスや過去の大会資料、ビデオの販売などを行った。また、「これから就農する子供のために養液栽培を検討したい」、あるいは「興味があるがよくわからない」という生産者の方が、「養液栽培マニュアル21」を購入する風景も見られた。ブースでの質問受付では、「初期投資の大きさがブレーキであるが・・・」、「どんな作物から始めるのが無難か」、「培養液管理では単肥の方がよいのか」など、かなり幅広い質問が多く、生産者の世代交代とともに養液栽培への認識が浸透してきていることを窺わせた。

その他の展示内容として、常連の企業・団体は一昨年と大きな違いはないものの、従来の製品に改良を加え、より経済性を重視したものが目立った。特に養液栽培関連資材については、省力化と収益性の両立に一段と力が入れられ、低コスト化の要求に対応する姿勢がみられた。

また培地や灌液装置についても、環境保全を意識した展示内容が前面に出され、廃材利用の堆肥や有機質培地、生分解性資材、排液殺菌装置、養液土耕システムなどがみられた。以前から環境を意識したフィルムや培地などの製品は出されていたが、見る側の意識もここ数年で大きく変化してきたことから、企業が早くから取り組んできた環境保全型資材に一層注目が集まってきたように感じた。珍しいものとしては、昨年の高知県での養液栽培研究会に参加された方は記憶も新しいと思うが、(株)コーシャ輸入のスモーク式防除機や三井金属工業の非破壊果実品質評価センサー、天窓50%オープンのリシェルハウス等があった。

新規参入企業・団体も数多くあったが、中には科学的な証明が少なく、効果にも疑問のあるといわれている薬剤や水などを商品として派手に宣伝しているものもあり、やや不安な感もしたが、ここはやはり混迷の時代、様々なアイデアの中から利用者が必要に応じて見極める実力も問われているものと理解した。

展示方法としては、従来の機械の実演や実物展示の他に、ビデオやパソコンを使っのパフォーマンスが多く、観る側の評価に対して強い印象付けを狙っていた。インターネットの普及から、農業関連の情報収集やパソコンによる即時栄養診断など、メディアの活用方法も大分変化してきたように思う。

海外からの出展企業も回を重ねるごとに増えており、今回はオランダに加えて、韓国からの出展が実に多かったのも印象的である。施設園芸・養液栽培資材についても、国内中心であった需要と供給の關係に、海外からの企業進出が

* 千葉大学園芸学部

増えることで、今後も生産者がより安く、より品質の高い商品を求める機会は増えるものと思われる。一方、国内の企業としてはさらに厳しい競争を余儀なくされるわけだが、国内外を問わず、生産者のニーズをいかに早く受けとめ、

商品化するかという情報、アイデア競争がますます激化するのではないだろうか。景気低迷の中で経済性・将来性のないものは淘汰されていく時期にきたことを実感させた。



写真1 カネコ種苗(株)のヤシガラを使った有機質培地



写真2 ネットフィムジャパン(株)のフィルター付き点滴灌水チューブ



写真3 50%オープンのリッセルハウス（販売元：(株)富田鉄鋼所）